

一九五五年（四五歳）

六月五日

旧四月十五日である。久渡寺のおしら講であり、木村さんと二人で調査に出かける。

おしら講は、今から約七十年、久渡寺の住職が、寺を維持するために始めたものであった。位を授けるといふ制度をつくったのである。五百円から千円出すと最低の位を貰うことが出来る。おしら講は「いたこ」とは関係がなかった。おしら講を利用しようとする人たちが主として集まる。

オシラ様の分布については、おしら様は津軽野にかなりひろまっている。この点については別項に書く。

八月三日

昨日往診した〇〇さんに自殺せられて、面食らう

八月七日

車中で次の小説をかく。

「小説と開業医の間」

急行「日本海」は直江津をすぎ、富山県に向かって走っている。陽は赤く、ゆらゆらと日本海の彼方におちていく。陽一は夕日を心ゆくまで眺めたかったが、座席が右側の山手であり、左側の海辺の客たちは、日覆をおろしているの、目的は果たせなかった。夕日を見たいばかりに、食堂車に行った。殆ど空席であった。

客が誰もいないので、広々と感ぜられ食堂まで海辺の窓にへばりつき思う存分海を眺めた。果てしない海、そのはるか彼方に、真っ赤に沈んでゆく陽、ほんとうに紅い陽であった。血液のように濃い毒々しい赤ではなかった。丁度食い頃、味満点の西瓜の肉の赤さで、太陽は沈みつつあった。小舟がすべてその数十一、黒い鉛筆でなでたよきのように、海にういていた。海は灰色であった。

注文したビールが卓上にたてられたのも無視して沈む太陽と海の色を眺めた。

すると、どやどやと六、七人の客が、すぐ前の席を占領した。

「水泳がアメリカに勝てそうだね」

「何かで、あちらを、抑えておかないことには」

「だがね、オリンピックのときは、日本の水上はきまって空白になるんだからな」

一昨日から東京で展開されていた日米水泳競技を批評し合っていた。面白い話だなあと思って陽一は、海に沈む夕陽から注意を、水泳の会話に転じた時、また二人入ってきた。つづいて一人、また一人と食堂車は忽ち満員になった。みんな二等車からの人々であったのが、彼のしゃくにさわった。

（俺は何故、三等に乗ったのだろうか？）

ふと、そんな疑問が頭に浮かんだ。

大学を出てから二十年、入院患者八十人もある病院の院長が、弘前から金沢までの十五時間もの旅を三等車でゆくのが、何か重大なことのように思われてきた。

彼は金沢大学のA教授のところに、医師を派遣して貰うに、旅に出たのであった。彼は東京の大学を卒業し、その大学の医局で精神科を専攻したのであったが、U教授から一種の破門にあい、出身の学校からは、医師を送って貰えないので、兄弟子のA教授がいる金沢に向かったのである。

何故、東京を破門になったかについてはいまも彼の悩みであった。戦前の昭和十五年か十六年の頃であった。日本精神神経学会が大阪で開かれた春のことであった。U教授は、陽一たちが苦心の研究発表をしている最中に、大阪から姿を消し、京都に現れ、京都と近江で、万葉集と古今集の古跡をかけめぐっていたのであった。

第一日の研究発表が終わり、その夜、ホテルに集まった医局員全員は、鳩首協議した。「教授が、国文学を勉強するなというのではありません。年一回という学会にだけは、立ち会って貰うよう、おねがいしよう。」

「脳の病理組織学では、日本一のU先生を、国文学から医学に、是が非でもとりもどしてほしい。」

医局員の総智恵をしぼった結論は、右の二つに絞られた。

「この二つを、誰が京都に行って先生に頼むか。」

「猫の首に、鈴をつけにゆくのですね。」

討議が重ねられた結果、若輩ではあるが、小説も書き、古典にも多少頭をつっこんでいるというので、陽一が当てがわれた。

陽一は、京都の宿舎にU教授を訪ねた。教授は何も言わないで、ききつづけた。陽一が帰るまで一言も言わなかったが、次の朝、学会の第二日があけたとき、U教授は、学会の座長席についていて医局一同の愁眉を開いてくれた。

学会が終わり、東京に帰ってからU教授は、昼食の時間にあの好きな万葉論をやらなくなり、ひたすらに、脳と精神の研究のことを語り、柿本人磨や紀貫之をあさるために図書館には行かなくなり、ひたすらに研修室におりて来た。

そうして二年がたったある夏の日のこと、研究会が終わったあと、医局は全員をあげ、銀座に出、ミュンヘンというビヤホールで大いに飲んだ。みんな若い顔で激論したあと、「U先生を研究室にとりもどしてくれたから、君自身は書きたかったらうんと小説を書いてもいいぞ。」

「いや、医局の決議で書いて貰おうじゃないか、先生いかがです？」

と、全員は、U教授の顔をみつめた。

「いかん、文学は別な人にやらせろ。」

教授はそれだけ言うと、不快な表情をして席をたってしまった。

それから一年たって、昭和十八年、陽一は召集され、山形の部隊で軍医をつとめていた。支那に於ける戦闘が思わしくなく、陽一もいよいよ大陸へ渡る形勢が見とられたので、暇乞いにとあって、陽一は上京し、教授室にU

教授を訪ねた。ドアをあけ、陽一がお辞儀をしても、U教授は返礼しなかった。机の抽出しをあけ、「中央公論」誌を引き出し、終わりに近い頁をあけ、陽一におし

出だしてよこした。「これは君が書いたのだろう。そうだろう。君には今日限り、この教室に、出入りして欲しくないんだ。」

教授はそれだけ言うと立った。

「講義に出なければならぬから。」

そう言って教授は、自分の部屋を出ていった。

陽一は、首をたれて教授室を出て医局にも顔を出さず、本郷通りに出て、中央公論を買い求め「鉢の木」に入り、食事の注文をし、頁を開いた。

題は「精神病学教室」であり、作者は「石上玄一郎」であった。一気によんでしまった。

(なんだ、これのことだったのか。)

(U先生も可哀そうだ。)

陽一は微笑を浮かべ、もう一度教授にあつて釈明すれば、すべてが片づくと思った。

好きな文学の研究をやめてくれと、大阪の学会のとき、先生に抗議したのを、陽一は思い出した。

その点については、陽一は少しも間違いを犯したとは思わなかった。U先生は日本の精神病学会を代表する人であり、先生の研究は、最もすぐれたものの一つであり、先生や、先生に指導せられた医局の研究は、大きい成果を期待せられていた時でもあったので、先生が国文学の研究に転ずるのは、学問のためにも、先生の学問を慕って、先生の研究室に集まっている三十余人の学徒の今後にとっても重大な影響を及ぼすのであった。

他面、万葉集や古今集の研究では、先生がいなくとも大して影響のないことが、国文学者の間から、たしかめられていたので、U先生の首に鈴をつけに行つたことを、陽一自身、大して先生に悪いことをしたと思つてなかつたので、中央公論を読み終つたとき、彼は安心した。

作者石上玄一郎は、陽一でないことは、陽一自身が一番よく知つていた。石上は、弘前の高等学校で太宰治と一緒に動機であつた。太宰や石上は文科であり、陽一は理科であつた。その石上が、陽一の研究日誌を持ち出してまとめあげたのが「精神病学教室」であり、その内容は、今日「脈なし病」という名で呼ばれているが、当時は本態不明の奇病について、U教授と陽一の二人だけが知つていて、そのことを書き立てていたのであつた。

陽一はもう一度教授を訪ね、石上と彼との関係を話し、了解をもとめたが

「石上というのは君だろう。この病気についてこれだけ書けるのは世界中にいない。」
と言って相手にしてくれなかった。

陽一は石上を探し、石上と相談し、中央公論社の記者にも協議し、三人で教授を囲み、
陳謝したが事態は、少しもよくならなかった。

医局長だったA氏に相談したら、
「教授には国文学をあきらめさせながら、君自身だけは、好きな小説を勉強し、小説家
とつきあっている。それを教授が怒っている。」
というのがA氏の返事であった。

陽一は、とうとう破門になってしまった。

それから、十七、八年の間、陽一は医局に帰ることが出来ず、故郷の弘前で開業し、
その開業の規模が大きくなり、新しく医者が必要となり、今年の春、名古屋で行われた
学会に出て、U先生に直接会い、医者を頼んだが

「東京と弘前では、遠すぎてね」
と拒否せられてしまった。

U教授に拒否せられても、患者は増えるばかりなのでどうしても新しく医者を探さね
ばならなかった。

当時の医局長がその後金沢の教授に転じてからも、十余年になるので、A教授に頼ん
でみる気になり、いま、急行「日本海」の食堂にいたのであった。

食堂に来る客が、みんな二等車からであったので、陽一はすっかり不安になってしま
った。日本海の波の彼方に沈んでいく太陽を眺めている余裕など、どこかに消えてしま
った。ビールをつづけざまにガブガブとのんだ。目頭が、ほてってくると、自分でも二
等車にのりかえようかとも思った。

三等車の客になった理由を考えてみた。その日八月七日であった。三十五人をこす従
業員の一月分の給料五十万円のうち、四十万円だけ、やっと昨日払えたばかりである。
政府からの支払金三百五十万円が、三ヶ月もおくれているので、この一年間、給料を月
内に払えたことがなかったので、彼は、従業員の手前もあるので、三等車にのったので
あった。

そんな不満にあせりながら、ビールを飲んでいると別な不安が浮いてきた。

(金沢に行ったとて、医者が手に入るだろうか)

との疑問であった。

(U教授に破門にさえなっていなかったら、先生のところには、六十人もの医局員がいる
のだから、一人や二人は何とでもしてくれたのに)

と思うと、U教授にひどく悪いことをしたのが、いまの自分の身につまされて、よくわ

かるのであった。

というのは、陽一自身、その半年間、つねに考え、そして迷い、いまだに決断つかないでいることがあった。それはU教授と同じことであった。彼は昨年十二月、「読売新聞小説賞」に佳作として十萬円の奨励賞をうけており、今年六月には、サンデー毎日の大衆小説に入選し、これ又十萬円を受賞していた。恩師のU教授に彼自身その研究をあきらめさせた万葉集には、独特の見解を持ち始めていたし、更には新古今集の研究では野心的なことまで考えていたのであった。昔のU教授が、大阪の学会をのがれて、京都ににげたときの境地に近いものがあった。

だが、陽一に、彼の好きな小説や文学の研究を許さないものがあった。

ついこの間の七月末の、自分の病院の労働組合との団体交渉においてであった。

「院長先生は、小説を書くのをやめてくれ。」

と労組の書記長がつめよった。

「どうしてです？」

と陽一は、おとなしくきいた。

「院長先生は、先生自身のものではありません。」

「それでは、誰のものだ」

「先生の奥さんだけのものでもありません。」

「面白いことを言うね。ではいったい誰のものですか？」

「私たち三十七人の従業員のものでもあります。」

「それもそうだね。」

「病院のものでもあります。」

「患者のものでもあります。」

「おやおや、まだあるのか。」

陽一はゆっくり訊ねた。

「という具合で、院長先生は、患者のため、病院のため、従業員のための、一つの道具であります。院長先生が好きだからといって小説とばかり、とりくんでおれません。私たちの生活を維持し、入院している患者への約束を守るためにも、先生の小説は、第二義的なものであります。」

その昔、医学の研究と、医局の研究生の指導のため、好きな国文学の研究を、あきらめさせられたU教授と同じ運命が、こうして陽一の上にも、めぐり来たのであった。

しかし、陽一はU教授のように簡単にあきらめなかった。開業医となるか、小説を書くか、どちらともまだきまっていなだけに、その両方に十分な検討を加えてみたかった。二つが成り立つとも思った。金沢に頼んで精神医学に十年も経験ある医師が手に入れば、

労働組合員の要求もみたすことが出来るし、高等学校時代から、病みついている小説病も満足させることが出来る。

そう思って旅にのぼったのであった。

それにしても陽一は、四十七歳であった。この年にして、小説家になろうとする冒険も思わないではなかった。芥川龍之介は、三十五歳で自殺したが、三十五歳までにあれだけの仕事をしたのであった。

島崎藤村は、比較のおそく小説に入ったが、それでも「破戒」を書いて小説に身を投じたのは、三十三か三十四の時であったと思われた。啄木は二十八歳まで、源実朝は二十三歳までにあれほどの作品を物した。それなのに、彼は四十七歳でやっと二つの小説が、一応問題になっただけである。

陽一は、作家や歌人たちの、伝記を読んでみた。彼を安心させてくれるのは、藤原定家であった。新古今集の代表歌人の一人である定家は四十をこし、五十をこして益々歌作に熱心になっていったのである。

陽一にとっては、五十の手習いであった。

夕陽は、いつの間にか日本海に没し、列車は富山駅に突入していた。

朝六時三十分の急行「日本海」にて金沢に向かう。途中からショウと木村さんに葉書を書く。車中割合にらかな旅であった。

旅行すると不思議に本がよめるのが、うれしい。文学春秋八月号の「絶望から生き返った日本人」と広島日赤病院長重藤文夫氏の「生きているヒロシマの悲劇」は仲々に興味をもって読んだ。

世の中に人一人たりともいますなら

ひろしま二度とあらしめるものかは

山はさけ海はあせせん世なりとも

ひろしまふたたびあらしめるものか

車中で、「小説と開業医の間」をかく。六〇〇〇字、原稿にして十五枚である。

金沢についたら、中村君迎えにきてくれていた。

九月三日

大清水の患者さんに、人形劇の戯曲を共同で書くことを提案する。夜〇〇の投身自殺の相談をうける。

